専攻科第１９回講座（２月４日）

第１９回講座
「渡り鳥と出会って知る、命、地域、地球、宇宙（３）」
講師　　安西　英明氏（日本野鳥の会主席研究員）
日時　平成 27 年２月４日（水）１０：００～１５：００
場所　県立手賀沼水の館及び我孫子市立鳥の博物館（我孫子市）

テーマは、冬の渡り鳥と出会う

この日の講座では、手賀沼のほとりにある親水広場（我孫子市）にて冬の渡り鳥を観察する観鳥会と県立水の館と隣接する市立鳥の博物館で安西講師による講義が行われた。「渡り鳥と出会って知る、命、地域、地球、宇宙」講座シリーズ（全３回）もこの日が最終回。冬の渡り鳥たちを間近に観察し講義に耳を傾けた。5 月に谷津干潟で春に渡ってくる渡り鳥を、11 月には行徳野鳥観察舎で秋の野鳥を観察しながら名物講義を楽しんできた。

手賀沼のシンボル彫刻

安西講師説明を聞く

春を迎えるために生き抜く野鳥たち

雪こそ降らない寒空の下、親水公園で林から地上に移動してきて餌を探すツグミを先ず見かけた。春を告げる鳥だとの解説が入る。手賀沼のほとりまで行くと、湖面を番いで泳ぐオオバン、警戒を解いてこちらにやってくる椋鳥、日向ぼっこする 2 羽のコガモ、カルガモやマガモも居た。白い羽を休めて優雅に泳ぐ 2 羽のオオハクチョウの姿も見ることができた。沖に向かって１羽が離れていくのを見て、“外敵が近くにいるのでしょう”と講師からのアドバイス。確かに沖合にはライバルらしき鳥の姿が見かけられた。

全員で記念撮影。背景は講義会場となった千葉県立水の館

オオハクチョウが番いで悠々と泳いでいた。雄は雌を守るためにライバルを追い払うために去っていった。

地上で目立ちはじめるツグミ 春の足音告げる使者

2015/1/31 6:30 | 日本経済新聞 電子版

これから寒さの本番という地域でも、季節は春に向かっている。暗くなるのが遅くなっていないだろうか。朝は早くなっていないだろうか。ツグミが地上で目立つようになっていないだろうか。

■遠めにも分かる45度の角度で胸を反らすポーズ

繁殖地のロシアから渡ってくるツグミは、飛来当初の10月には山や林に多い。庭のカキが熟す11月ごろからは身近でもよく見かけるようになり、しばらくは枝先で木の実を食べているようだ。年明け以降、しばしば地面に降りるようになるのは、樹上の実がなくなってくることが一因だと思われる。

ツグミの胸の斑紋には個体差があり、帯のように見えるものもいる＝写真 石田光史

スズメより大きく、ハトより小さいムクドリサイズで、尾が短いムクドリと比べると、スマートに見える。胸の斑紋、白っぽい眉、茶色の翼も特徴だが、遠目にも動き方でわかる。足を交互にトコトコ歩きながら地面をつつくムクドリと違い、45度の角度で胸を反らしてポーズをとっているように見える。

食物を見つけると、小走りに向かっていくが、摘んで食べると、再び45度でじっとしている。落

繁殖地のロシアから渡ってくるツグミは、柿が熟す 11 月頃から身近でもよく見かけるようになるとか。

オオバンは手賀沼のマスコット鳥湖沼やその周辺にすみ、よく泳いでいた。

オオバンの番い。７，８月を除いた季節に見ることができるようになったとか。

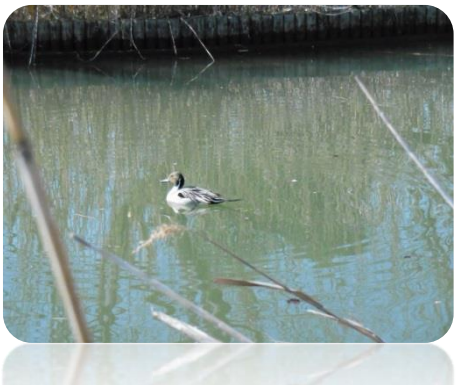
都会でもよく見かける椋鳥は人への警戒心が薄いのか、手が届きそうな近くまで寄ってきた。

湖岸にはコガモの番いが羽を休めて日向ぼっこをしていた。見かけた野鳥たちの多くは番いだった。

嘴の先が黄色いカルガモ

子供を連れて泳ぐカルガモ親子も見かけた。

色鮮やかなマガモ。



親水公園の池を泳ぐオナガガモ。尾が長い鳥だと教えてもらう。少し遠かったのでよく確認することができなかった。

自宅に戻り、インターネットで確認してみると、確かに尾が長いのが特色の鴨の様だ。

オオハクチョウ

オオハクチョウ

良く似た海鳥たち。沖の彫刻のある休み場で見かけた。足と嘴が黄色で先端が赤い鳥がウミネコ（左）、足と嘴が赤い小型の鳥がユリカモメ（左）。背中が黒いセグロカモメ（中央）